

小學讀本

阿部弘藏纂述

卷六

冊一  
數部

校學

登録  
番号

國書門小教

No. 2023

6 冊の内  
6

六

九

燃  
野  
備  
本

2  
32-2

阿部弘藏纂述

高等科

# 小學讀本

明治二十年六月二日 文部省檢定 濟小學校教科用書

小學讀本卷六

東京 阿部弘藏 編

## 第一章

德川吉通 祖父光友ノ頃ヨリ、府庫空シクシテ、國

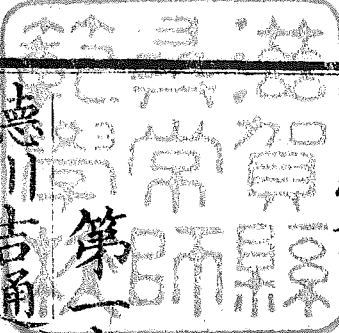
用支ヘザルマデニナリケレバ、家司ノ人々相議

シテ、先ヅ步卒ノ老イタル者二百餘人ヲ放チケ

ルニ吉通之ヲ聞キテ家司ヲ召シテ言ヒケルハ、

凡ソ儉約トイフハ、國家ヲ維持センガ爲ナラズ

ヤ、步卒トイフトモ、祖先以來我が家ニ仕ヘテ年



ヨリシ者ナリ人ノ壯ナル間ハ之ヲ使ヒ、老イタル後ハ之ヲ棄テナバ、其困難思ヒヤラル、ナリ我尾張六十萬石ノ身ニテサヘ、二三代ノ窮蹙ニテ群下ニ給スルコト能ハザルハ、汝等カ知ル所ナラン、況テヤ彼等壯ナラバ、何處ニ行キテモ一己ノカニ食ミヌベケレド、年老イテ今俄ニ逐ハル、トキハ誰アリテカ其老イタル者ヲ召シ抱ヘン、其上彼等ハソレソレニ妻子モアランヲ、イヅクノ人カ之ヲ養フベキ、一家ヲ安クセントテ數千人ヲ窮餓ニ迫ラスルハ不仁ノ甚シキ者ナ

リ、彼等ヲ扶助シタレバトテ、我が家ニサホドノ損トイフ事モアルマジ、タゞ儉約トイフバカリニ心ヅキテ、上下一致ニ心ヅカザルハ、本意ニアラズ、總ジテ下ノ者ホド骨折ル、コトハアラジ、上下トハ、敷居ト鴨居トノ如シ、鴨居ハ上ニ在リテ、逸シ、敷居ハ下ニ在リテ、勞ス、タゞ養ヒオカニコソ、慈仁ナルベケレトアリケレバ、家司落涙シテ過ヲ謝シ、悉ク之ヲ召シ還シケルトゾ、

## 第二章

事ノ急ナルニ臨ミテ、能ク其難ヲ救フモノハ、心

川學讀本 卷六 金港堂  
ヲ平ニシテ之ニ處スルノ方ヲ案ズルニ由ル亞  
米利加ニ一少年アリ其住メル所ニ一ツノ橋ア  
リテ其上ニハ鐵路アリ汽車毎日往來セシガ或  
ル日ノ事トテ近隣ニ火ヲ失シ火勢漸ク廣カリ  
テ遂ニ橋ヲモ燒キ落シヌ人々來リ集ルトイヘ  
ド只烟焰ノ下ニ奔走スルバカリナリ少年心ニ  
謂ヘラク既ニ朝ノ九時ナレバ汽車ハ必ズ此橋  
ニ向ヒテ來ルベシ若シ此災ヲ知ラザランニハ  
車モ人モモ口トモニ轉墜センイデヤ危難ヲ救  
ヒ得サセントテ橋ヨリ凡ソ六十間餘ヲ隔テタ

ル所ニ至リ遙ニ彼方ヲ望ミ見ルニ果シテ汽車  
ハ走セ來レリ其疾キコト疾風ノ如クマタ、ク  
ヒテニ近ヅキケレバ少年心ヲ焦ダテ、之ヲ止  
メント欲シケルガ又心ニ思フヤウ只口ニテ之  
ヲ呼バンニハ人或ハ信ゼザルコトアルベシ自  
ラ身命ヲ抛チテ此危難ヲ救ハンニハ若カズト  
心ヲ決シテ直チニ路ノ中央ニ進ミ入り兩手ヲ  
舉ゲテ聲ヲ限ニ叫ビケレバ機關手先ヅ回轉  
ヲ止メテ其由ヲ問ヒケルニ橋ノ燒ケタルコト  
ヲ告ゲシカバ衆皆車ヨリ下リテ危難ヲ免レシ

トゾ、

### 第三章

元祿ノ頃、西國ニ名高キ術士アリテ、弄丸ニ妙ヲ  
得タリ、或ル時福岡侯ノ藩士僚友ヲ招キ集ヘテ  
饗應シケルガ、其座ニ在リケル人ノ、彼ノ術士ノ  
事ナド語り出デタルヲ、主人聞キテ、サラバソレ  
ヲ召シ寄セ、珍カナル術ヲセサスベシトテ呼ビ  
ニ遣リケルニ、頓テ來ニケリ、主人賓客ノ心慰ム  
バカリノ術何ナリトモ爲ベシトイヘバ、術士カ  
シコマリテ、席ニ進ミタリ、一座コレヲ熟視シケ

ルニ、如何シケン、始メントシテハ止ムコト度々  
ニナリテ、果テハ默然トシテ時ヲ移シ、又主人怒  
リテ、汝如何ナレバ術ヲバ爲サザル、一座不興ナ  
リ、疾ク爲ヨト言ヘバ、彼ノ者命セニヤ及ブベキ  
トテ、聲ヲ潛メテ言ヒケルヤウ、己此術ヲ學ビ得  
テヨリ、コレヲ以テ生業トスルコト數年ニナリ  
ヌレド、未ダ一度モ後レヲ取リシコトナシ、此御  
席ニテモ、面白ク仕リテ、興ニ供ヘンモノヲト存  
ジツレド、左ノ上席ニ居タマフ年老イタル御人  
ノ、タゞ何トナク怖シク覺エテ、心後レテナシ難

シ、暫時彼ノ御方ヲ外ニオハシマヌヤウニ計ラ  
ヒタマハルベシ、サラズバ己ガ術ハ行ヒ難シト  
申スニ、其指ス所ヲ見レバ、只原益軒常ノ如ク恭  
然トシテ在ルナリケリ、主人心ニ感ジテ、術士ニ  
ハ物トラセテ歸シ、更ニ穀ナドカヘテ酒ヲ侑メ  
席終リテ後、人ニ語りテ、益軒ノ徳ヲ稱シアヘリ  
シトゾ、

#### 第四章

小田原ノ北條氏ニ仕ヘタリシ遠山景氏ハ武藏  
國久良岐郡釜利谷ト云フ所ノ領主ニシテ、地ノ

利ニ明ナリケルガ、或ル人景氏ニ、此金澤ノ入海  
ヲ埋ミテ田トナサバ、若干ノ利アルベシ、今暫ク  
疆場ノ無事ナル時ニ當リテ、此企ヲナサバ、萬世  
其賜ヲ受クベシト勸メタリシニ、景氏默然トシ  
テ物イハズ良アリテ、此入海ヲ視ルニ、人カヲモ  
テ穿チタルニハ有ルベカラズ、今埋メタテ、田  
トナサンニハ、自ラマタ他ニ此ノ如キ入海ヲ穿  
タズバアルベカラズ、サアリテハ、我が領地ニ利  
アリトモ、必ズ外ニ害アルベシトテ聞キ入レザ  
リシトナリ、或ル人又曰ク、鶴見ノ原ハ四方六里

ニ及ブベシ、鎌倉將軍ノ時ヨリ拓キテ新田ニセ  
バヤト企ツル人ハアリシナレドモ、其事成ルニ  
至ラザリキ、ソハ思慮ノ精カラヌ故ナルベシ、今  
是ヲ思ヒ起シタマヒナバ、末代マデノ益ナラン  
ト勸メケレバ、暫シ物ヲ案ズルサマナリシガ、頓  
テ筆ヲ執リテ、四方六里ハ、徑リ一里半ナリ、此田  
歩凡ソ一千零四十九萬七千六百歩ナレバ、町段  
法ニテ、二千九百十六町ナリ、路敷畔畝ナド引キ  
去リテモ、二千町許ノ田畑ナルベシ、農夫四千人  
許ノ耕ス處ナリ、田畝少ナクテ人多キハ利アリ、  
人少ナクテ田畝多キハ損アリ、新田ヲ思ヒ立レ  
ンヨリ、古田ノ荒レザランコトコソ願ハシケレ  
ト云ヒタリシトゾ、

### 第五章

徳川家齊ノ將軍タリシ時、居間ノ側ラニ一室ヲ  
設ケ、小キ木牌ニ有司ノ姓名ヲ記シ、傍ヘニ在職  
ノ年數轉任ノ月日ナド、詳ニカキ添ヘケセ、何事  
ニテモ思フ旨アレバコレニ驗ナドツケ置キテ、  
聽政ノ暇ニハ、誰々ハ其掌ル務メカタ行キ届キ、  
誰々ハ諸事ノ計ラヒカタ宜シナド、常ニ意ニ

トメ置キテ黜陟ノ事ヲバイト嚴ニシ、苟且ナル  
コトハ露バカリモナカリシトゾ、退老ノ後ノ頃  
トカヤ、一夕側近ク仕ヘケル老女、私ニ求ルコト  
アリテ、家齊ノ様子ヲ窺ヒ、折モヨシトヤ思ヒケ  
ン、只今閣老參政ノ中ニテ、誰殿ガ最モ器量アル  
者ニ候ヤト、何ゲナキサマニ言ヒ出デケルヲ、家  
齊聞キテ、余ガ少年ニテ、一橋家ヨリ將軍職ヲ繼  
ギシトキニハ、松平越中戸田山城ノ二人、老中ノ  
職ニ在リテ、サマゲマニ余ヲ苦メケレバ、餘リ堪  
ヘ難サニ、如何ニモシテ彼ノ兩人ヲ退ケバヤト

思ヒシ程ナリシガ、ナガノ歲月ノ間、カク苦メラ  
レシ甲斐アリテ、初ニツラク思ヒシ事モ、イツノ  
間ニカ積リツモリテ、大ニ余ガ思慮ノ資トナリ  
後ニハ政事向ノ事ドモ、ヨク其是非得失ヲ考ヘ  
定ムルコトノ、サマゲ難カラヌヤウニナリシハ、  
全ク二人ノ心シテ、余ヲ教ヘ導キタル勞ニコソ  
ヨレ、今ハ老中ドモノ中ニ、カ、ル人物ノ在ラザ  
ルガ故ニ、婦女子ドモニタヨリテ、官職ヲ求メン  
ト計ル者ドモ、將タナシトモ云ヒカタシトアリ  
ケレバ、此一言痛ク老女ガ胸ニコタヘシニヤ、深



ク恐レ入りテ退キシトゾ

第六章

支那周ノ時、齊ノ東郭ニ宿瘤女トイフ者アリ、此女項ニ大ナル瘤アルヲモテ、人之ヲ宿瘤ト呼ビ又、齊ノ閔王郊外ニ出デシ時、百姓盡ク集リテ、其儀衛ヲバ望觀セシニ、獨リ此女ハ餘念ナク桑ヲ採リテアリケレバ、閔王怪ミテ、寡人出遊シテ、車騎甚ダ衆キガユエニ、老弱男女皆其業ヲ棄テ、此ニ聚レリ、然ルニ汝ハ道旁ニ桑ヲ採リテ、一夕ビモ寡人ヲ顧ミルコトナキハ、何故ゾト問ハセ

ケレバ、宿瘤女答ヘテ曰ク、妾ハ父母ヨリ桑ヲ採レトノ教アレド、大王ヲ觀ヨトノ命ナシト、閔王之ヲ聞キテ、深ク感ジ、汝ハ奇女ナリ、惜ムベシ、項ニ大ナル瘤アリテ、イト見苦シキコトヨト言ヒケルニ、宿瘤女又、女子ハ心ノ美シキコソ貴ケレ、瘤アリトモ何ノ妨カアラント答ヘケレバ、閔王之ヲ聞キテ、益嘆賞シ、實ニ汝ハ賢女ナリ、直チニ後乘ニ乘リテ、宮中ニ參ルベシトアリケルニ、宿瘤女謝シテ曰ク、父母ノ教ヲ受ケズシテ參ルハ、奔女ナリ、カ、ル者ヲバ、大王イカデ用井タマフ

ベキト、閔王大ニ慙チテ、寡人甚カ倉卒ナリ、改メテ汝ヲ召スベシト、夫ヨリ王宮ニ歸リ、新ニ使者ヲ遣シ、禮ヲ厚クシテ、之ヲ後宮ニ迎ヘ、立テ、后トセリ、其後宿瘤女、屢閔王ヲ輔翼シテ、大ニ内治ノ功アリシカバ、隣國其徳ニ化シテ、強盛ナル三晉ヲ侵シ、秦楚ヲ懼レシメシトナリ。

### 第七章

魯西亞帝國ヲ創メタル彼得ハ、十七歳ニシテ國君トナレリ、武備ノ未ダ振ハザルヲ憂ヘテ、夙ニ海陸ノ兵制ヲ擴張シ、以テ此國ヲ興サント欲シ。

少年五十人ヲ徵シテ、一隊ヲ編ミ、日耳曼ノ式ニ倣ヒテ、之ヲ訓練シ、常ニ語リテ曰ク、我皇帝ノ貴キヲ忘レテ、汝等ニ接スルガ如ク、汝等モ亦我ト和順スベシトテ、居常士卒ト衣食ヲ同ジクシ、戈ヲ枕ニシテ、幕中ニ起臥ス、又此國ニ良工ノアラザルコトヲ知り、和蘭人ノ造リタル帆船ヲ見テ、自ラ之ヲ駛行スルコトヲ學ビ、人ヲ和蘭ニ遣リテ、造船ノ術ヲ受ケシム、カクテ自ラ行キテ、之ヲ學バント欲シ、從者數名ト俱ニ海ニ航シテ、和蘭ノ桑坦ニ到リ、嘗テ知ル所ノ冶工ノ家ニ寓シ、詐

リテ彼得密查爾ト號シテ、其魯帝ナルコトヲ知  
ラシメズ、日夜工人ト伍シテ船ヲ造リ、其業始メ  
テ就リテ、各國ニ歷遊シ、英吉利ニ至リテ、其國第  
一ナル船匠ノ名ヲ得タリ、常ニ節儉ニシテ人ニ  
誇ラズ、惡衣惡食シテ、久シク艱苦ヲ嘗メ、後ニ國  
ニ歸リテ、大ニ富國強兵ヲ謀リケレバ、功業永ク  
傳ハリテ、遂ニ今日ニ至リヌ、

### 第八章

板倉重宗或ル時京ノ郊外ヲ過ギケルニ、トアル  
民家ノ幼兒打群レテ遊ビ居シガ、アレ板倉コソ

通リツレト言ヒケルヲ、重宗馬上ニテ聞キトガ  
メ、我不肖トハイヘド、幕府ノ代官トシテ、コ、ニ  
アレバ、京中ノ老弱男女ヲイハズ、我ヲカクオシ  
クダシテイフ者アルベカラズ、然ルニ此家ノ兒  
輩ノカクイフハ、常ニ家人ノ我ヲ怨ミタルヲ聞  
キ馴レシ故ナルベシ、定メテ仔細アルコトナラ  
ントテ、其家ノ名ヲ聞カセテ歸リ、翌日其家主ヲ  
召シヨセテ、汝先年訴訟シタル事ヤアル、今尋ヌ  
ルハ少シモ氣ツカフ事ニテハナシ、アリシヤウ  
ニ申スベシト問ヒケルニ、始メノ程ハ、辭シテ言

ハザリシガ、再三問ハレテ、此上ハカクサズ申上  
ゲン、某ノ年某ノ月、父ノ遺物ノ配分ノ事ニ就キ  
テ、一族ノ者ト争ヒ訴ヘシガ、其者構ヘテ無實ノ  
事ヲ申シカケツレド、證人トモノ多クシテ、遂ニ  
相手ノ勝トナリヌ、其次第ハシカジカナリト、詳  
ニ述べケレバ、有司ニ命ジテ、其年ノ簿案ヲクラ  
セケルニ、少シモ違ナカリシカバ、重宗ハタト掌  
ヲ拍チテ、是ハタシカニ我ガ聽キアヤマリタル  
ナリ、イト残念ナレド、ハヤ年久シキ事ナレバ、今  
更スベキヤウナシ、其配分ホドヲ償ヒテ、我ガ過  
ヲ謝スベシトテ、自ラ金ヲ出シテ、其者ニトラセ  
ケルトゾ、

### 第九章

白河天皇ノ時、殺生ヲ禁ゼラレケレバ、絶エテ魚  
鳥ヲ鬻グ者ナシ、其頃一人ノ貧僧ノ、年老イタル  
母ヲ持チタルガアリケリ、其母魚ナケレバ物ヲ  
食ハズ、日數ヲ經ルマ、ニ、老ノカヤウヤクニ弱  
リ行キテ、今ハ恃ミ少ク見エケレバ、僧悲ミニ堪  
ヘズシテ、魚取ル術ハ知ラ子トモ、自ラ川ノ邊ニ  
臨ミ、衣ヲ褰ゲテ魚ヲ窺ヒ、ハエト云フ小魚ヲ、一

ツニツ取リシニ、禁制重キ頃ナリケレバ、官人見  
咎メテカラメトリ、先ヅ其仔細ヲ問ハル、ヤウ、  
殺生禁斷ノ事、汝イカデカ知ラザラン、況ヤ僧ノ  
身トシテ、此禁ヲ犯スコト、其罪イト重カリトア  
リケルニ、僧涙ヲ流シテ申スヤウ、此制重キコト  
ハ、固ヨリ承ル所ナリ、夕トヒ制ナクトモ、此振舞  
アルベキニアラズ、イカニセン老イタル母アリ  
テ、己一人ノ外恃メル者ナシ、齡タケ身衰ヘテ、魚  
ナケレバ物食ハズ、此頃天下ノ禁制ニヨリテ、魚  
鳥ノ類愈得ガタキニヨリ、身力既ニ弱リタリ、是

ヲ扶ケン爲ニトテ、思ヒノ餘リ、川端ニ臨メリ、罪  
ニ行ハレンコト、固ヨリナリ、此魚今ハ放ツトモ  
生キガタシ、願クハ之ヲ母ノ許ニツカハシ、快ク  
受ケタマヒシヲ聞キテ、刑ヲ蒙ラント答ヘケレ  
バ、是ヲ聞ク人々、涙ヲ流サズトイフコトナシ、天  
皇聞シメシテ、養老ノ志淺カラヌヲ憐ミタマヒ  
ソノ罪ヲ赦シテ、物アマタ下シ賜ヒ、乏シキコト  
アラバ、重子テ申スベキ由ヲ仰セラレケルトナ  
リ、

第十章

南北朝ノ時赤松光範ノ士宇野六郎住吉ノ役ニ  
戰死セリ其子阿王時二十歳ナリケルガ光範ニ  
乞ヒテ曰ク願クハ潛ニ往キテ楠氏ニ仕ヘヨキ  
折ヲ窺ヒテ父ノ讐ヲ復セント光範其幼キヲ憐  
ミテ之ヲ遣ルニ忍バズ阿王固ク乞ヒテ遂ニ赤  
坂ニ至リ城下ニ彷徨セシニ人アリ怪ミテ之ヲ  
訊ヒケレバ應ヘテ我ハ宇野六郎ノ子ナリ父死  
シテ家ヲ族人ニ奪ハレ身ノ置キ處ナキマニ  
カクハサマヨヒ來ヌト言フ其人連レ歸リテ正  
儀ニ告ゲルニ正儀之ヲ哀ミテ左右ニ置キ心

ヲ推シテ善ク遇シケレバ阿王モ亦心シテ勤メ  
タリ漸ク歲月ヲ經ルマニ正儀益之ヲ器トシ  
嘗テ采邑ヲ授ケントセシニ阿王ハ未ダ軍功ノ  
アラザルヲ以テ受ケズカクテ六郎ノ七年ノ忌  
辰ニナリケレバ阿王感念シテ是夜正儀ヲ刺サ  
ント欲セシニ折節正儀阿王ノ年長ズルヲ以テ  
召シテ冠ヲ加ヘ名ヲ正寛ト賜ヒテ祝スルニ御  
賜ノ兜鎧ヲ以テセシカバ阿王感激シ侍坐シテ  
夜ニ至リケルガ隙ヲ窺ヒ身ヲ起シテ之ヲ刺サ  
ントシタレドモ未ダ手ヲ下スニ忍バズ正儀從

容トシテ背坐シ少シモ掛念セザリケレバ阿王  
再三氣ヲ厲セドモ、竟ニ刺スコト能ハズシテ出  
デ、慟哭セリ、衆愕キテ之ヲ視ルニ阿王ナリ、因  
リテ具サニ其實ヲ告ゲ、刀ヲ抽キテ自ラ刺サン  
トセシカド、奪ハレテ止ミニキ、乃チ髮ヲ剃リテ  
僧トナリ、山中ニ入り、正寛ヲ以テ號トナシテ、身  
ヲ終ヘタリシトゾ、

### 第十一章

支那明ノ張揚園ノ曰ク、人貴賤ヲ論ズルコトナ  
ク、總ベテ人ヲ知ラズバアルベカラズ、人ヲ知レ

バ、則チ能ク賢ニ親ミ、不肖ニ遠ガカル、而シテ身  
安ク家保ツベシ、人ヲ知ラザレバ、則チ賢否倒置  
シ、親疎乖反シ、六身危ク家敗ル、不易ノ理ナリ、賢  
者ハ必ず剛直、不肖者ハ必ず柔佞、賢者ハ必ず平  
正、不肖者ハ必ず偏僻、賢者ハ必ず虚公、不肖ハ必  
ス私繫、賢者ハ必ず謙恭、不肖ハ必ず驕慢、賢者ハ  
必ず敬慎、不肖ハ必ず恣肆、賢者ハ必ず讓リ、不肖  
ハ必ず争フ、賢者ハ必ず誠ヲ開キ、不肖ハ必ず險  
詐、賢者ハ必ず特立シ、不肖ハ必ず附和ス、賢者ハ  
必ず持重、不肖ハ必ず輕捷、賢者ハ必ず成ヲ樂ミ、

不肖ハ必ず敗ヲ喜ブ賢者ハ必ず韜晦シ不肖ハ  
必ず表暴ス賢者ハ必ず寛厚慈良不肖ハ必ず苛  
刻殘忍賢者ハ嗜慾必ず淡久不肖ハ勢利必ず熱  
ス賢者ハ身ヲ持スルコト必ず嚴不肖ハ人ヲ律  
スルコト必ず甚シ賢者ハ必ず從容トシテ常ア  
以不肖ハ必ず急猝ニシテ更變ス賢者ハ必ず其  
遠大ヲ見ル不肖ハ必ず其近小ヲ見ル賢者ハ必  
ズ其親ム所ニ厚久不肖ハ必ず其親ム所ニ薄シ  
賢者ハ必ず行其言ニ浮ギ不肖ハ必ず言其實ニ  
過ク賢者ハ必ず己ヲ後ニシテ人ヲ先ニシ不肖

ハ必ず己ヲ先ニシテ人ヲ後ニス賢者ハ必ず善  
ヲ見テ及バザルガ如クシ人ノ善ヲ道フコトヲ  
樂ム不肖ハ賢ヲ妬ミ能ヲ嫉ミ人ノ惡ヲ稱スル  
コトヲ好ム賢者ハ必ず無告ヲ虐セズ強禦ヲ畏  
レズ不肖ハ必ず柔ナレバ則チ之ヲ茹ヒ剛ナレ  
バ則チ之ヲ吐ク此ノ若キ類正ニ白黒氷炭ノ如  
ク昭然トシテ同ジカラザレドモ總ベテ公私義  
利ニ外ナラザルノミト

第十二章

支那周ノ時楚ノ將子發秦ヲ攻メシガ糧米盡キ



ハテケレバ人ヲ國王ノ許ニ遣リテ其供給ヲ乞  
ヒ、兼子テ母ノ安否ヲモ訪ハシメタリ、時ニ母其  
使者ニ向ヒテ士卒ハイヅレモ恙ナキカト問ヒ  
ケルニ、使者答ヘテ士卒ハ皆菽粒ヲ食ヒテ、纔ニ  
飢ヲ陵ギヌト、母重子テ然ラバ將軍ハ恙ナキカ  
ト問ヒケルニ、使者答ヘテ朝夕稻粱ノ美穀ヲ食  
ヒタマヘリト、カクテ子發ハ秦ヲ破リテメテ夕  
ク國ニ歸リケルニ、母固ク門戸ヲ鎖シテ内ニ入  
ルコトヲ許サズ人ヲモテ之ヲ責メテ曰ク、汝越  
王句踐が吳ヲ征伐セシトキノ事ヲ聞カガルカ、

嘗テ一壺ノ醇酒ヲ獻ズル者アリケルニ、句踐一  
人シテ飲マズ之ヲ江水ノ上流ニ注ガシメ、士卒  
ヲシテ下流ノ水ヲ飲マシメタリ、大江ノ水何ノ  
甘味モ添ハザレドモ、銳氣平生ニ五倍セリ、後又  
一囊ノ糗糒ヲ獻ズル者アリケルニ、句踐又軍士  
ニ分チ與ヘテ之ヲ食ハシム、一粒ノ食、嗑ヲ踰ユ  
ルニ足ラザレドモ、銳氣平生ニ十倍セリトカヤ、  
今汝兵ニ將トナリ、全軍飢餓ニ迫ルヲモ顧ミズ、  
獨リ美味ヲ貪ルハ何事ゾ、假令戰ヒテ勝ヲ得タ  
リトテ、ソノ術ヲ得ンニハアラズカ、ル者ヲバ、

吾ガ子トスルハイト愧カシ今ヨリ吾ガ門ニ入  
ルコトナカレト痛ク咎メ懲ラシケリ子發之ヲ  
聞キテ大ニ先非ヲ悔イ深ク其罪ヲ謝シテ後家  
ニ歸ルコトヲ得タリシトゾ實ニ將軍ノ母タラ  
ン者ハカクアリタキコトナリ

### 第十三章

黄金珠玉ハ天下ノ寶ナリ然レドモ猶是ヨリ重  
キ者アリ光陰是ナリ黄金ハ散ズトモ復得ベク  
珠玉ハ失フトモ復還ルベシ彼ノ光陰ハ一夕ビ  
去レバ復來ラズ時アルトキニ時ヲ得ザレバ今

日ノ後ニ今日ナシ先哲ノ曰久聖人ハ尺璧ヲ貴  
バズシテ寸陰ヲ重ンズ時ハ得難クシテ失ヒ易  
ケレバナリ誠ニ思ヘ瓦徳ガ蒸氣機關ヲ發明セ  
シガ如キ士提反孫ガ火輪鐵路ヲ發明セシガ如  
キ弗蘭克林ガ雷電ノ理ヲ究メテ避雷器ヲ發明  
セシガ如キ密爾孟得斯鳩ガ有益ノ書ヲ著述セ  
シガ如キ是皆光陰ニヨリテ其功ヲ爲シタルモ  
ノナリ若シ夫レ光陰ナカリセバ如何ナル發明  
著述ヲモナスコト能ハズ如何ナル奇功偉績ヲ  
モ建ツルコト能ハズ實ニ光陰ハ天下ノ至寶ナ

ラズヤ、諺ニ曰ク、難キコトハ今日做セ、明日モ易  
キニアラズ、今日學バズシテ來日アリト謂フコ  
トナカレ、今年學バズシテ來年アリト謂フコト  
ナカレ、來日ノカハ、僅ニ以テ來日ノ事ヲ爲スニ  
足ルノミ、何ゾ能ク今日ノ失ヲ補フニ足ラン、秋  
冬既ニ至レバ、春夏ノ失時ヲ補フコト能ハズ、老  
耄既ニ至レバ、壯時ノ失時ヲ補フコト能ハズト、  
分陰ハ寸陰ノ本ナリ、寸陰ハ尺陰ノ本ナリ、一時  
ノ光陰ハ一日ノ本ナリ、一日ノ光陰ハ一月ノ本  
ナリ、百年ノ光陰實ニ分秒ヨリ生ズ、學者宜シク  
之ヲ省スベシ、

### 第十四章

英吉利ノ窩斯德侯某、罪アリテ囚レトナリテ、  
蘭ニ在リケル時、寒夜爐ヲ擁シテ獨坐シタリシ  
ニ、忽然トシテ藥罐ノ蒸氣沸騰シ、蓋ヲ動搖シテ  
既ニ覆ラントスル勢ナリシカバ、之ヲ熟視スル  
コト良久クシテ、此蒸發ヲ抑壓スルトキハ、必ズ  
藥罐ノ破裂センコトヲ悟リタリ、然レドモ身ハ  
縲紲ノ中ニ在レバ、未ダ之ヲ試ミルコト能ハズ、  
其後赦ニ遇ヒテ、巨砲一門ヲ購ヒ求メ、中ニ冷水

三分ノ一ヲ貯ヘ、固ク口ヲ塞ギテ、下ニ烈火ヲ置  
キケルニ、果シテ巨砲一晝夜ヲ經テ破裂セリ、是  
ヨリ思慮ヲ運ラシ、工夫ヲ凝シテ、遂ニ蒸氣ヲ以  
テ高サ四丈ノ上ニ、水ヲ騰揚スベキ機器ヲ發明  
セリ、其後蘇格蘭ノ人惹迷斯瓦德、幼クシテ思フ  
物理ニ潛メケルガ、或ル日藥罐ノ蒸氣ノ沸騰ス  
ルヲ見テ、箸ヲ其中ニ入レテ、動搖ヲ窺ヒ居シラ  
伯母來リテ笑ヒテ曰ク、汝カ、ル益ナキ事ヲ爲  
シテ、惜ムベキ光陰ヲ費スハ、怠リナラズヤト言  
ヒケルニ、是レ遊戯ニハアラズ、全ク天下ノ爲ニ

未曾有ノ機器ヲ造リ出サントテナリト云ヒテ、  
後益刻苦シ、成長ニ及ビテ、遂ニ日用至便ナル蒸  
氣機關ヲ發明セリ、其後亞米利加ノ人羅伯福敦  
蒸氣カヨリ工夫シテ、初メテ哈多孫河ニ火輪船  
ヲ泛ベタリ、其後英吉利ニ於テ火輪車ヲ造リ出  
シケレバ、是ヨリ水陸萬里ノ間、時日ヲ費サズシ  
テ相往來スルコトヲ得、天下ノ利用極リナシ、然  
ルニ其濫觴ヲ尋ヌレバ、唯藥罐ノ蒸氣ヲ沸騰ヨ  
リ起リタルノミ、

第十五章

豐臣秀吉始メ木下藤吉郎トテ織田信長ノ歩卒  
タリシ時同僚杉原某ノ女阿萬トイフヲ娶リ夕  
シト人ヲ以テ言ヒ入レケルニ阿萬ハ速ニ返事  
ヲモセズ己ガ知ルベナル伊藤右近ガ許ニ行キ  
テ謀リケルニ右近言ヒケルハ彼ノ藤吉ハ賢キ  
者ナレバ末々ノ爲ニモ宜カルベシ夜具鏡櫛笄  
ナドハ我が方ニテ得サスベシサレドモ知ラル  
ル如キ困窮ナルバ金錢ハ遣シガタシ汝ノ伯父  
淺野彌兵衛ハ家ノ暮シハ裕ナレバ往キテ借ル  
ベシトテ彌兵衛ガ許ニツカハシケルニ金壹兩

ト木綿一端鼻紙三折トヲ貰ヒ受ケテ來レリ右  
近大ニ歡ビテ夜具ナド洗濯シ吉日ヲ撰ビ藤吉  
郎ガ許ニ嫁セサセケリ秀吉後ニ關白ト爲リテ  
右近ガ事ヲ思ヒ出シ天下ニ令シテ尋サセケル  
ニ右近ハ其時名ヲ清右衛門ト改メテ甲州ノ加  
藤某ガ許ニ食客ト爲リテ在リツル由聞エケレ  
バ乃チ大坂城ニ召シ昔ノ事ドモ語り出デ、淚  
ヲ流サレ夫人手ツカラ縵子ノ夜具ニ銀五十枚  
鶴ノ香合ヲ授ケラルシカノミナラズ清右衛門  
夫婦ガ綿服ノイタク汚レタルヲ見テ昔ノ禮ニ

洗濯シテ參ラスベシ、脱ギテ行カレヨトテ、別ニ  
衣ヲ賜ハリケレバ、夫婦著カヘテ退キケリ、カク  
テ十日ホドアリテ、先日ノ洗濯成リシトテ、城ニ  
召シ、又モ手ヅカラ返シ與ヘケルガ、其後祿ヲ七  
百石給セラレケルトゾ、

### 第十六章

徳川家光ノ近臣永井某、病ニ罹リケルガ、餘リ久  
シク引籠リタレバトテ、一日押シテ出デケルニ、  
家光顔色ノ悪キヲ見テ、汝イマダ全愈セルニハ  
アラジ、猶引籠リテ養生セヨトアリケレバ、又十

五日ガ程家ニ在リテ、此度ハ快復セリト申シ出  
デケレバ、家光側近ク召シテ米ノ價ヲ尋子ケル  
ニ、其シカト存ゼザル由ヲ答ス、サラバ鱒ハト尋  
子ケルニ、亦存ゼズト答ヘタリ、家光少シク氣色  
ヲ損ジ、心ナキ申條カ大カ、ル事ドモハ、老中ナ  
ドニ尋子ラレヌモノナレバ、汝等ニ尋子置キテ、  
予ガ心得トスルコトナリ、サレバ汝等ニモカ子  
テ能ク承リ置キ、尋子ニ應ジテ具サニ答フベキ  
ニ不心得ノコトナリ、勤仕ニ暇アラサル折ハ、理  
リトヤ言ハン、此頃長ク引籠リタルウチニ、務メ

テ心掛クベキヲソレニテハ予ガ左右ニ在リテ  
益ナキコトナリトアリケレバ、其深ク愧ヂ入リ  
テ、ソレヨリ日毎ニ物ノ價ヲ市ニ問ハセテハ出  
デシカド、絶エテ再ビ其尋子ハナカリケリ、カク  
テ家光薨ジテ後、其大番頭ト爲リ、後ニ仕ヲ致シ、  
隱居ノ身ト爲リテモ、日毎ニ米ノ價ト鰯ノ價ト  
豆腐ノ滓ノ價トヲ市ニ問ハセケレバ、其子訝リ  
テ、仔細ヲ問フニ、告ゲズ、病重クナリシ時、初メテ  
家内一同ニ打向ヒ、詳ニ事ノ由ヲ語り出テ、サテ  
イフヤウ、只今ニ及ビテハ、何ノ益ナキコトナカ

ラ、其時慚愧心肝ニ徹セシガ故ニ、一生忘ルマジ  
ト思ヒテコソ、斯クハ致シツレト語りケルトゾ、

### 第十七章

源義光ハ、豊原時元ガ弟子ニテ、大食調入調  
ノ曲ヲ傳ハリケリ、時元ノ子時秋、父ノ失セシ時  
未ダ幼カリシカバ、終ニ受ケザリケリ、カクテ義  
光ノ兄義家、陸奥ノ清原武衡家、衡ヲ攻メケル時、  
義光ハ京ニ在リテ、合戦ノ事ヲ傳ヘ聞キ、官ヲ辭  
シテ馳セ下リ、江州鏡ノ宿マデ著キケルニ、一人  
ノ男子後レジトテ馳セ來ル、義光怪ミテ見レバ、

時秋ナリ、何故ニ來ツルゾト問ヒケルニ、トカク  
ノ事ハ言ハズシテ、只隨從スベシトバカリゾ言  
ヒケル、義光伴ヒタマハンコト本意ナレド、此度  
ノ下向ハ物騒シキ事アリテナレバ、然ルベカラ  
ズト、頗ニ止ムルヲ聞カズ、強ヒテ從ヒケリ、義光  
力及バズシテ、モロトモニ下リ、遂ニ足柄山マデ來  
リケルガ、義光馬ヲ扣ヘテ曰ク、止メ申セドモ用  
弁タマハデ、コレマデ伴ヒタマヘルコト、其志淺  
カラズ、去リナガラ、此山ニハ定メテ關門モ嚴シ  
クテ、容易クハ通スマジ、是ヨリ歸リタマヘトイフ

ヲ時秋猶モ肯ハズ、其時義光時秋ガ思フ所ヲ悟  
リテ馬ヨリ下リ、人ヲ遠ガケテ、柴ヲ切りハラヒ、  
楯ニ枚ヲ敷キテ、一枚ニハ我が身坐シ、一枚ニハ  
時秋ヲスエ、鞞ヨリ一紙ノ文書ヲ取り出デ、時  
秋ニ見セケリ、コハ父時元ガ筆ナル大食調入調  
ノ譜ナリ、笙ハアリヤト時秋ニ問ヒケレバ、候ト  
テ、懷ヨリ取り出シタリ、其時義光、是迄慕ヒ來レ  
ル志、定メテ此事ニテゾ侍ラント云、則チ悉ク秘  
曲ヲ授ケ畢リ、サテイフヤウ、義光ハカ、ル大事  
ニヨリテ罷リ向ヘバ、身ノ安危モ測リ難シ、萬一



安穩ナランニハ都ノ再會ヲ期スベシ子ハ豊原  
數代ノ樂工ナリ我ニ志ヲオボサバ速ニ歸京シ  
テ道ヲ全ウセラレヨトイヒケレバ時秋理ニ服  
シテ此ニテ始メテ袂ヲ分チケルトゾ

### 第十八章

觀世次郎大夫享保ノ頃京ノ河原ニ舞臺ヲ造リ  
テ勸進能ヲ興行ス觀ル者蟻ノ如ク群集セシガ  
木賊刈ノ一曲殊ニ評判高カリケリ或ル日農夫  
ト覺シキ者十人ばかり連レ立ちテ來リテアリ  
ケルガ數千ノ人々ノ悉ク讚嘆スル中ニ何カヒ

ソヒソ私語キアヒテ受ケズ顔ナリケルヲ觀世  
舞ナガラ此體ヲ見認メサテ能モ終リケルトキ  
人ヲバ木戸ニ遣ハシテ彼ノ者ドモヲ留メサセ  
ケレバ何事カハト大ニ驚キシヲ觀世サワガマ  
ヤウニ樂屋へ呼び入レテ言ヒケルハ我が今日  
ノ木賊刈ハ一層出來ノ能キヤウニ覺エ侍リシ  
ニ果シテ群集セル人オシナベテ感ゼラレタル  
様子ニ見エタルガ其許タチハサモ思ハレヌニ  
ヤ何ヤラン私語キアハレタルコソ心得子ト詰  
リシカバ彼ノ者ドモ答フルヤウ我等ハ信州其

原ト申ス所ノ土民ニテ木賊刈ルコトヲ業トス  
ル者ナルガ、木賊刈ノ興行アルヨシ聞キ及ビ、ナ  
グサミナガラ能トヤランヲ觀テ、一生ノ話ノ種  
ニモセマホシト思ヒテ、今朝ヨリ芝居シテ觀ル  
ニ、心ナキ賤ノ我々ドモ、イト面白ク覺エタリ、  
去リナガラ、只今セラレタル手ブリノ中ニ、イデ  
イデ木賊刈ラウヨト申ス所ノ鎌ノ手、我等ガ爲  
ナレタルトハ聊異ハリアル故ニ、私語キアヒシ  
マデノ事ナリト對ヘケレバ、觀世ノ曰クソハマ  
タ面白キ見咎メヤウナリ、其許タチハ如何ニシ

テ刈ラル、ヤト尋子ケレバ、サレバ、木賊ハ向フ  
ヘ一刀ニ刈ルモノナリ、大夫ハ今同ジ所ヲ前  
ナル方ヘ二刀ニテ刈リタマヒキ、アレニテハ木  
賊ハ刈ラレジト云ヒケレバ、觀世大ニ感ジテ、物  
取ラセツ、厚ク賞シテ還シケリ、其後又江戸ニ  
テ木賊刈セシ時、農夫ガ批判ヲ打守リテ、向ノ方  
ヘ一刀ニ刈リケレバ、其能ノ出來一段ヨカリケ  
ルトナリ、

### 第十九章

徳川秀忠ノ乳母ハ世ニ大婆殿トイフ、其子某ハ、

科アリテ流罪トナレリ、大婆殿乳母ノ故ヲ以テ、  
秀忠ノ待遇淺カラザリケルカ、其身ノ豐ナルニ  
モ似ズ月毎ニ一兩度ヅ、飯ヲ大盤ニ盛り小者  
末々マデヲ呼ビ入レテ、親ラ飯ヲ椀ニ盛りテ振  
マヒ又、或ル日本多正信入り來リ、此體ヲ見テ大  
ニ驚キ、御家ノ女中モ多カレバ誰ニゾ仰セツケ  
ラレテ差支ハアルマジキニ、何故カクハシタナ  
キワザヲバシタマフゾト詰リケレバ大婆殿飯  
ヒヲ止メテ、正信ニ向ヒ、其許近頃驕レリト、人々  
ノ謂ヒツルヲ、全ク虚説トノミオモヒ居タリシ

ニ只今ノ一言ニテサテハ人ノ云フコト實ナリ  
ト思ハレ又、其許彌八郎ノ時ヲ打忘レラレタル  
カ、妾昔微賤ナリシ時、一飯ノ恩ヲ人ニ施サント  
思ヒテモ得カタカリケルニ、今日此ノ如ク饗應  
ノ出來ルコソ、何ヨリノ幸ナレ、争デ昔ヲ打忘レ  
テヨカラシヤ、其許ハ既ニ大老ニマデ爲リナガ  
ラ、カ、ル事ヲバ怪マル、カラハ、天下ノ政事モ  
覺束ナシト、痛ク懲ラシメラレシカバ、正信深ク  
愧ヂテ歸リ又、其後大婆殿病ニ罹リテイト心モ  
トナキ由聞エケレバ、秀忠自ラ病牀ニ就キテ願

フコトアラバ申スベシトアリケルニ、大婆殿願  
トテハ更ニナシ、只一向ニ大公ノ御遺訓ヲ奉ジ  
タマヒテ、天下ノ御政務怠ラセタマハザランコ  
トヲナン、禱リマ井ラスルト答ヘケレバ、秀忠大  
ニ悦ビテ、厚ク之ヲ慰メツ、ヤヲラ其座ヲ起チ  
去ラントセシニ、大婆殿急ニ呼ビ留メテ、賤妾此  
世ヲ去リテ後、萬一愚息ガ罪ヲ赦サセラル、コ  
トモアラバ、却リテ冥路ノ妨トナリヌベケレバ、  
決シテ彼ガ事ヲバ尊慮ニ掛ケサセタマフナト  
言ヒ終リテ、遂ニ目ヲ閉ヂシトゾ、富貴ニシテ貧  
賤ヲ忘レズ、私愛ノ爲ニ公法ヲ誤ラザルハ、尋常  
ナラヌ識見ト謂フベシ

## 第二十章

佐野ノ城主天徳寺了伯或ル時琵琶法師ニ平家  
ノ曲ヲ語ラセテ聞キケルガ、未ダ語ラヌ先ニ我  
ハ唯哀レナルコトヲ聞キタクコソアレ、其心得  
シテヨトイヒケレバ、法師承リヌトテ、佐々木高  
綱ガ宇治川ノ先陣ヲ語り出デケルニ、了伯雨傘  
ト涙ヲ流シテ泣キタリケリ、サテ又今一曲前ノ  
如ク哀レナルコトヲ聞キタシトアリケレバ、那

須與一が扇ノ的ヲ語り出デ又其曲半ニ及ビテ了伯落涙數行ニ及ビケリ後日ニ近侍ノ者ドモ三過シ日ノ平家ハ如何聞キツルゾトアリケレバ皆面白キ事ニ覺エ又但シ一ツノ心得ヌコトコソ候ヘ二曲共ニ壯快ニテ哀レナルカタハ少シモナキニ君ニハ感涙ニ咽バセタマヒツルコト今ニ不審ナル事ト申シアヒヌト答ヘタリ了伯驚キテ只今マデハ汝等ヲ頼モシク思ヒシが今ノ一言ニテカラ落シタルゾ先ヅ佐々木が事ヲヨク心ニ浮ベテ見ヨ源頼朝舍弟範頼ニモ賜

ハズ寵臣ノ景季ニモ賜ハヌ生倅ヲ高綱ニ賜ヒシニハアラズヤ其甲斐モナク此馬ニテ宇治川ノ先陣セズシテ人ニ先ヲ越サレナバ必ず討死シテ再ビ歸ルマジキ覺悟シテ出デケルナラン又那須與一モ人多キ中ヨリ撰バレテ只一騎陣頭ニ出シヨリ馬ヲ海中ニ乗り入レテ的ニ向フニ至ルマデ源平兩軍鳴ヲ静メテ望觀ス若シ射損ジナバ味方ノ恥辱タルベシ馬上ニテ腹カキ切リテ海ニ入ント始メヨリ思ヒ定メタルナラニ其志ヲ察シナバ弓箭トル道程哀レナルモノ

ハアラジ我ハ毎モ戰場ニ臨ミテハ、佐々木那須  
ガ心ニテ槍ヲ取ル故ニ、平家ノ曲ヲ聞クトキモ  
兩人ノ心ヲ思ヒヤリテ、落涙ニ夕ヘザリシナリ、  
然ルニ汝等ハ哀レニハ思ハザリシカ、サテハ汝  
等ノ武ハ只一旦ノ勇氣ニ任セテ、眞實ヨリ出ツ  
ルニテハアラジカト思ハルレバ、頼モシカラズ  
ト言ヒテ、又歎キケルトゾ、

### 第二十一章

徳川家光目黒ニ鷹狩セシ時、從者四五人ヲ從ヘ  
テ成就院ト云フ寺ニ過ギリケルニ、住持ノ僧頭

中引キカツキテ、垣ユヒテ居タリ、家光フ、借リ  
テ休ミ候ハント言ヒケルニ、住持ノ僧、人々ハイ  
ヅクヨリ參ラセタマヒシゾト問ヒケレバ、家光  
故サラニ、將軍家ノ扈從ノ者ナリト答フ、サテ客  
殿ヲ見回スニ、悉ク菊ヲイロドリテ畫ガケリ、拙  
キ工ノワザトモ見エザリケレバ、家光僧ニ打向  
ヒテカ、ル片田舎ノ寺ニハ珍ラシキ結構カナ、  
イカナル檀那ノワタリツルゾト尋子ケルニ、コ  
ノ江戸遠キ境ナレバ、然ルベキ檀那トテモナ  
ニ保科正之ト申サル、方ノ母公ガ、常ニ祈禱ノ

事ナド御頼アレド、ソレモ家貧シケレバ、布施ノ  
物裕ナラズ、其外ハ皆數ニモアラヌ人々ナリ、彼  
ノ正之殿ハ、今ノ將軍ノ御弟ト承ルニワツカノ  
領知ヲ充テ行ハレテ、イト貧シクワタラセタマ  
フコソイトヲシケレ、賤シキ者ニテモ、兄弟ノ親  
ミ深キハ人ノ習ナルニ、イカナレバヨキ人ハ情  
ナキ者ナラントイヒシカバ、家光少シク氣色ヲ  
損ジテ、從者ヲキツト見ヤリ、イガ參ラン、君ニモ  
ハヤ還御ナラセタマフベキ程ナリトテツト立  
タレケレバ、扈從ノ者ドモハ、皆門外ニ打出テ又、

シバシガ程ニ扈從ノ人々群リ來リテ、君ハイツ  
クヘナラセラレシゾト問ヒケレバ、住持ノ僧我  
ハ君公ノ事ハ知ラズ、扈從ノ人トテ、今マデコ、  
ニ休ハレシト答フ、ソレコソ君公ヨトイハレテ、  
打驚キ、アナ悲シヤ、如何ナル罪ニカ遇ヒヌラン  
トテ、一月許リガ間、門ノ外ニ足音高ク人ノ過グ  
ルニモ、魂ヲ消スバカリナリ、然ルニ正之ニハ多  
クノ領地ヲツケラレテ、出羽ノ山形ノ城ニ封ゼ  
ラレ、成就院ヘモソレトナク寄附ノ知行ヲ充テ  
行ハレシトゾ、

第二十二章

山内一豊始メ織田信長ニ仕ヘケルガ、或ル年東國第一ノ駿馬ナリトテ、安土ニ牽キ來リテ商フ者アリ、織田家ノ士是ヲ見ルニ、誠ニ無雙ノ駿足ナレド、價アマリニ貴シトテ、求ムル人ナク、徒ラニ牽キテ歸ラントス、一豊此馬ヲ得ント思ヒテ望ニ堪ヘカ子タレド、如何ニモ其力及バザレバ、家ニ歸リテ、身ノ貧キ程口惜キコトハナシ、一豊仕宦ノ初ニアハレカ、ル馬ニ打乘リテ、主君ノ前ニ打出ヅベキモノヲト、獨言シケルニ、妻ツク

ツクト聞キテ、價ハイカバカリゾト問ヒケルニ、黄金拾兩トコソイヒツレト答ヘタリ、妻聞キテ、サホドニ思ヒタマハンニハ、其馬求メタマヘ、料ヲバ參ラスベシトテ、鏡匱ノ底ヨリ取り出シテ、一豊が前ニ差置キタリ、一豊大ニ驚キ、此年頃身貧シクテ、苦シキ事ノ多カリシニ、此金アリトモ知ラセズテ、心強クモ包ミタリ、サハアレド、コタビ此馬ヲ得ヤシトハ思ヒヨラザリキト、且ツハ悦ビ、且ツハカコチケレバ、妻仰ノ旨ハ理ナレド、コハ妾が此御家ニ參リシ時、父此ヲ鏡ノ下ニ入



レタマヒテ、世ノ常ノ事ニハ用井ルコト勿レ、汝  
ガ夫ノ一大事トアラン時ニ參ラセヨト、戒メタ  
マヒキ、家ノ貧シキハ、世ノ常ナレバ、堪ヘ忍ビテ  
モアリナン、然ルニ今度京ニテ簡馬ノ舉アルベ  
シト承ハリ又、君ニハ仕ノ始ナレバ、良キ馬ニ召  
シテ見參アラセラレンコソ、面目ナレ、サレバ是  
ニ増シタル大事ハナシト思ヒテ、今コソ始メテ  
參ラスルナレト答ヘタリ、一豊悦ブコト限リナ  
ク、竟ニ其馬ヲ得テ、頓テ其日ニ打乘リテ出デシ  
カバ、信長大ニ驚キテ、事ノ由ヲ聞キ、東國第一ノ

馬、遙ニ我方ニ牽キテ來リシヲ、空シク歸サン  
ハ、口惜キコト、思ヒシニ、一豊久シク流浪ノ身  
ヲ以テ之ヲ求メ得タルハ、信長ガ家ノ恥ヲ雪ギ  
タル上ニ、弓箭トル身ノ用意イト殊勝ナリト、深  
ク感稱シ、是ヨリ次第ニ登庸セラレシトナン、

### 第二十三章

支那前漢ノ韓信ハ、初メ至リテ貧シクシテ、シカ  
モ何ノ所作ヲモセズ、常ニ人ノ許ニ行キテ、食ヲ  
求メテ日ヲ送リケレバ、人皆嘲リ又、或ル時、南昌  
トイフ所ノ亭ノ長ガ許ニ行キテ、食ヲ求メテ日

ヲ送ルコト數日ナリケル程ニ亭ノ長ガ妻是ヲ  
厭ヒテ家内早天ニ食ヲト、ノヘ、サラヌ體ニテ  
居ケルヲ韓信サリトハ知ラズシテイツモノ如  
ク朝飯ノ頃ニ行キケルニ、早食ヒヲハリタル後  
ナレバ面目ナゲニ歸リケリ、其後濱邊ニ魚ヲ釣  
リテ居タリケルニ、年老イタル姥是ヲ憫ミテ常  
ニ食ヲ運ビ與ヘケレバ、韓信悦ビテ我世ニ出テ  
タラバ、此恩ヲ報ズベシトイス、姥聞キテ怒リテ  
イフヤウ、御身長高キ男ニテアリナガラ、何ノ所  
作ヲモナサズ、飢ニ迫ルガ憫レサニコソ育ミツ

レ、我ハ報謝ヲ願フ者ニアラズトイヒケリ、其後  
市ニ出デケルニ、少キ者ドモ韓信ヲ侮リテ曰ク、  
汝好ミテ長劍ヲ帶ブトイヘド、心ハサコソ臆病  
ナラメ、カクイフコトヲ口惜ク思ハ、其劍ニテ  
我ヲ殺シテ死子カシ、ソレガナラズバ、我が股下  
ヲカイクブレトイス、韓信熟ラウチナガメケル  
ガ、頓テウツブシニナリテ、股下ヲハラバヒ出デ  
タリ、一市ノ人々之ヲ見テ、ドツトウチ笑ヒケレ  
ド、自若トシテ去リヌ、其後高祖ノ將ト爲リテ、屢  
大功ヲ建テ、遂ニ諸侯トナリケルガ、其昔食ヲ惠

ミシ、姥ヲ召シテ千金ヲ與へ、南昌ノ亭ノ長ニハ  
僅ニ百錢ヲ與へ、市ニテ股ヲクバラセシ者ドモ  
ヲ召シテ、汝等ハ皆壯士ナリトテ、中尉ノ官ヲ授  
ケタリ、カクテ諸人ニ語リケルハ、我ニ無禮ヲ加  
ヘシ時、彼等ヲ殺サンハイト易キコトナレド、我  
ハ大義ヲ思ヒ立チタレバ、カ、ル小事ニハ心セ  
ザリシナリト、

### 第二十四章

昔羅馬ニテ、罪人ヲ以テ野獸ト戰ハシメシコト  
アリシトキ、一罪人ヲ引キ出シテ、大ナル獅子ト

戰ハシメントセシニ、獅子ハ忽チ罪人ノ前ニ猛  
獍ノ狀ヲ變ジ、尾ヲ揮リ頭ヲ低レテ、其足ヲ舐リ  
ケリ、罪人ハ、ヤ死地ニ陥リタルコトナレバ、生  
ケルコト、チモアラザリシガ、餘リニ己ニ媚フル  
ヲ見テ、我ヲ愛スル故ヲ覺リヌ、數千ノ觀衆コレ  
ヲ見テ、且ツハ驚キ、且ツハ怪ミ、暫シドヨメキワ  
タリタリ、帝乃チ罪人ヲ召シテ、其故ヲ問ヒケル  
ニ、答ヘテ曰ク、臣ハ安得拉哥勒ト云フ奴隸ナリ、  
臣ガ主人亞非利加ノ郡守ニテアリシトキ、臣其  
虐使ニ堪ヘズシテ、利未ノ大漠ニ逃レシガ、折シ

モ炎熱燬クが如クナリケレバトアル洞穴ニ入  
リテ熱ヲ避ケシトキ、イト大ナル獅子アリテ、息  
ヲモツギアヘズ、馳セ來レリ、臣之ヲ見テ、始メテ  
其窟ナルコトヲ知りタレドモ、既ニ避クベキ路  
ナケレバ、身ヲ一隅ニ潛メタリシニ、獅子ハ洞中  
ニ入り來リテ、臣ヲ害セントハセズ、一脚ヲ擡ゲ  
テ、臣ニ示シ、救ヲ乞フガ如クナリケレバ、之ヲキ  
ツト見ルニ、肉ノ中ニ太キ芒刺ノ夕チテアルナ  
リ、因リテ其意ヲ覺リ、之ヲ抜キ去リ、肉ヲ推シテ  
膿汁ヲ出シ、創ノ面ヲ拭ヒシニ、獅子ハコ、チヨ

ゲニ打睡リタリ、其後獅子ト一穴ニ住ミ、起卧飲  
食ヲ共ニスルコト三年ナリ、一日獅子ノ他ニ出  
テ、在ラザル時穴ヲ去リテ、三日が間旅行セシ  
ガ、復兵卒ニ捉レテ、故ノ主人ニ還サレケレバ、主  
人遂ニ臣ヲ此處ニ送リテ、人獸相鬪フノ刑ニ處  
セラレタリ、然ルニ今此刑場ニ臨ミテ、思ヒモヨ  
ラズ、サキツ年創ヲ療セシ獅子ニ遭ヒテ、カクハ  
危険ヲ免レタリト述べケレバ、聽ク者皆耳ヲ傾  
ケテ、其奇ニ感ジ、聲ヲ揚ゲテ、安得拉哥勒ヲ赦サ  
レヨト罵リケレバ、帝之ヲ聽シテ、其獅子ヲ安得

拉哥勒ニ賜リケルトゾ、

第二十五章

寛政ノ頃、江戸湯島ニ住メル紙屑買三郎兵衛ト  
イヘル貧家ノ兒九歳ノ時、人買ノ手ニ執ハレテ  
奥州ニ下リシニ、道ニ遺チタル紙屑アレバ、必ズ  
拾ヒテ懐ニ入レケルヲ、人買怪ミテ尋子シニ、拾  
ヒ置キテ父ニ參ラセナバ、サゾ喜ビタマハント  
思ヒテ集ムルナリト答フ。又此兒飲食起臥ノ度  
ゴトニ、必ズ父母ノ方ニ向ヒテ拜シツ、今頃ハ  
如何シテオハスラント、涙ヲ流シテ父母ヲ慕フ

サマ、人ヲ感動セシカバ、サスガニ暴キ人買モ、數  
日ニシテ大ニ感悔シ、深ク愧ヂ歎キテ思ヘラク、  
我が淺マシキ世渡リニカ、ル孝子ヲサヘ苦シ  
ムルコト、ナレリ、虎狼ニモ劣リタル者トヤイ  
ハン、イデヤ此子ヲ還シヤリ、タトヒ餓エテ死ス  
トモ、此業ハ必ズ廢メント、心ニ決シ、遂ニ道ヨリ  
引キカヘシテ、江戸ニ來リ、親モトヲ尋子、黄昏頃  
ニ、其家ニ至リ、又折シモ父母ハ、我が子ノ事ヲ言  
ヒ出デ、共ニ悲ミ居タリケルニ、表ノ方ニテ此  
子ヲ歸シ參ラセン、受ケ取りタマヘトイヒス、テ

テ内ニ押シ入レ、逃ゲ去リ又、父母ハ思ヒガケナ  
キコトナレバ、且ツハ驚キ、且ツハ喜ビ、ウレシ涙  
ニクレケルガ、ヤ、アリテ三郎兵衛心ツキ、今ノ  
人ヲ止メテ、禮謝ヲノベント、走り出デ、尋ヌル  
ニ、行方シレズ、殊更日モ暮レ果テタレバ、センカ  
タナクテ、空シク歸リ、我が子ニ事ノ様子ヲ聞キ  
テ、人買ノ心改リシモ、我が子ノ孝心深キガユエ  
ナリトテ、夫婦ノ感喜限リナシ、此子長ズルニ從  
ヒテ、孝行彌、厚ク幼年ヨリノ事ドモ官ニ聞エテ、  
若干ノ賞銀ヲ賜リシトゾ、後數年ヲ經テ、彼ノ人

買ハ僧トナリ、湯島ニ尋子來リシニ三郎兵衛ハ  
既ニ亡セテ、彼ノ孝子父ノ名ヲ繼ギ、其家次第ニ  
繁榮シテ、今ハ紙商人トナレリ、サテ人買ハ孝子  
ニ向ヒテ、我ハ君ニ愧ヂテ心ヲ改メ、出家シテ亡  
キ兩親ノ冥福ヲ修シ、今ハ小庵ノ主トナリテ、心  
安ク世ヲ渡リヌト云ヒテ、互ニ昔ヲ語リアヒ、二  
三日ガホド留リテ別レケリ、先キノ人買ニハ似  
モツカヌ善人トハナリシトゾ

### 第二十六章

佛蘭西ノ某地ニ、一人ノ指物師アリ、心バハ正シ

クシテ能ク其業ヲ勵ミタリ、或ル日古キ書棚ノ  
修復ヲ引キ受ケ、家ニ預リ置キテ、數月ノ後、釘ヲ  
抜キ、板ヲ放チシニ、中ニ一ツノ秘藏セル物アリ、  
取リテ見ルニ、證券ト封金トニテ、合セテ五千圓  
アリ、此人生レテヨリ、カ、ル大金ヲ見シコトナ  
ケレバ、大ニ驚キテ、其妻ニ示シケルニ、妻ハ大ニ  
喜ビケリ、然ルニ夫ノ曰ク、此金ハ、職業ヲ以テ得  
タルモノニアラザレバ、之ヲ隱シ貯ヘンハ、盗人  
ニ異ナラズト、妻ノ曰ク、君ノ言ハ理ナレド、之ヲ  
見出サザレバ、世ニナキモ同ジ、之ヲ我が物トス

トモ、誰カハ咎メン、夫ノ曰ク、イヤトヨ、得ベカラ  
ズシテ得ルハ、禍ノ本ナリ、之ヲ貯フルハ、禍ヲ貯  
フルニ同ジト、妻ハ大ニ感ジテ、ノタマフ所一々  
理ナリ、失ヘル人ノ身トナラバ、如何バカリカ、口  
惜カルベキ、疾ク還シタマヘト云ヒケレバ、急ギ  
金ヲ持チテ、向キニ修復ヲ托セシ人ノ家ニ尋子  
至リケルニ、住ミ荒ラシタル家ニ、二人ノ少女ア  
リ、姊ハ病ノ牀ニ臥シ、妹ハ縫針ノ業ヲシテ、絲ヨ  
リ細キ烟ヲ立テヌレバ、カ、ル大金ノアルベシ  
トモ覺エズ、因リテ其實ヲ探ランガ爲ニ、先ヅ語

リ出デ、曰久人ハ光陰ヲ空シク費スベカラズ、  
老後ノ安樂誠ニ少キ時ノ辛苦ニ在リト、妹之ヲ  
聞キテ、ノタマフコトハ理ナレド、我が身覺エシ  
業モナク、僅ニ一條ノ針ニテ世ヲ渡ルコトナレ  
バ、二人ノ生活スラ圖リカ子タル今日ニ、争デカ  
遠キ老後ノ事ニ及バン、コレニ就キテモ、父ノ世  
ニ在サヌコトノ口惜シサヨ、父ノ在セル時ハ家  
富ミ榮エテ、數千金ヲモ貯ヘシガ、コタビ不慮ニ  
モ亡セラレシヨリ、其金ノアリカラ知ラズシテ、  
遂ニ今ノアリサマトハナリヌト、語リ畢リテ打

泣キタリ、此人サテコソト思ヒ、言ヲ改テ曰ク、喜  
ビタマヘ、其金ハ此ニ在リ、速ニ數ヲカゾフベシ、  
必ズ不足ハアルマジ、コレニテ姉君ノ病ヲモ養  
ヒ、御身モ今ヨリ安樂ニ暮シタマヘトテ、金ノ出  
デタル始メ終リヲ物語リケレバ、姉モ妹モ夢カ  
トバカリ打驚キテ、嬉シ涙ニクレ、深ク其志ノホ  
ドヲ謝セシトゾ、

### 第二十七章

蟻ドモアマタ集リテ、炎天ニ蚯蚓ノ枯死シタル  
ヲ引キタリ、其内ニ、若キ蟻ツブヤキテ曰ク、世間



ニ生物多シトイヘド、皆飛ビアルキ、走り廻リテ  
互ニ餌ヲ求メ、息フ時モアルモノヲ我等如何ナ  
ル因果ニヤ、終日足ハ地ニツカズ、偶餌ヲ見テモ、  
一人ノカニテ得ルコト能ハズ、衆ヲ頼ミ汗ヲ流  
シテヤウヤク穴ニ引キ入ル、ハ淺マシキ身ノ  
分限カナト言ヒケルニ、老イタル蟻之ヲ戒メテ  
曰久、汝他ノ生物ヲ羨ムコトナカレ、物皆命アリ  
叢蟲ハ木ノ枝ニカ、リテ安ラケク見ユレドモ、  
我叢蟲トナラ子バ、彼か心ニイカホドノ苦勞ア  
ルカヲ知ラズ、總ジテ物ハソレソレノ形ヲ受ケ、

ソレソレノ地位ニ居テ、ソレソレニ苦勞スルコ  
ト世ノ常ナリ、人モ同ジク此世ニ生レテハ、同ジ  
ク苦勞スベシ、我一人ノ世界ニハアラス、造化ノ  
命ズル所ニ任セテ可ナリ、一人飽食煖衣シテ、何  
ノ苦勞ヲモナサジト願フハ、大ナル私ナリ、他ノ  
生物ハ、餌ヲ求メテ是ガ爲ニ羅ニカ、リ黏ニツ  
キテ、終ニ性命ヲ失フ者モ多シ、我幸ニ人ニ食ハ  
ルベキ厚味モナシ、自ラ形ノ微ナルコトヲ知ル  
ガ故ニ、生キタル蟲ヲ取ラントモセズ、其屍ヲ拾  
ヒテ賞玩スレバ、人モ咎ムルコトナシサレドモ

未ダ蟻ノ飢死シタルコトヲモ聞カズ、汝身ノ分ヲ知リテ外ヲ願フコトナク身ニ禍ノナキヲ今日ノ福ト思ヒテ樂ムベシ、古人蜂蟻ニ君臣ノ義アリト稱スルハ、同僚睦ジク一食ヲ得テモ集リテ之ヲ食ヒ、一穴ニ居テ争ヒ惡ムコトナク途ニ逢フトキハ、相揖シテ禮ヲ失ハズ、群リ行クトキハ、列ヲ亂サバレバナリ、然ルニ人トシテ分ヲ犯シテ慾ヲ恣ニシ巧ヲ用井テ人ヲ欺キ、己ヲ利セントシテ人ニ害アルヲモ顧ミズ、同僚相争ヒ、一族相和セズ、不義無禮ニシテ君ニ事フルノ道

ヲ知ラザル者ハ微物タル我ニ恥ヂザランヤ、汝勞ヲ厭ヒテ他ヲ羨ムハ、我が性命ニ乖クモノナリト言ヒケルトゾ、

## 第二十八章

松平信綱幼名ヲ長四郎トイヒテ、徳川秀忠ノ世子家光ノ未タ竹千代トイヒシ頃、遊ビ相手ニ召シ使ハレケルガ、或ル時寢殿ノ軒ニ雀ノ巢クヒ、雛ヲ育ミタルヲ竹千代コナタヨリ覽テ長四郎ヲ取リテ參レト命ジケルニ、信綱ハ其時十一歳ナレバ、如何ニモカナフマジキ由ヲ答スサレバ

晝ハ驚キテ飛ビ去リモヤセン、ヨク見置キテ、日暮レテ後、コナタノ軒ニ梯カケテ忍ビツ、登リテ取ルベシト、近侍ノ者ドモ勸メケレバ、長四郎カナク、日暮ニ及ビテカラウジテ傳ヒ行キケルガ、フミ損ジテ壺ノ内ニ墜チ又、秀忠物音ヲ聞キテ、刀引キ寄せ、障子ヲ開ケバ、夫人手燭ヲ取リテ隨ヒタリ、秀忠火影ニスカシ覽ルニ、長四郎ニテアリシカバ、汝ハ何故爰ニ來レルゾト問ヒケルニ、今日ノ晝、御殿ノ軒ニ雀ノ雛ノ居リツルヲ見テ、餘リノホシサニ取リニ參リタリト答ス、イヤ

イヤ汝ガ意ヨリ出デシニテハアルマジ、誰カ教ヘケルゾト、サマザマニ推問アレド、幾度モ争ヒ又、齡ニモ似ゲナキ大膽モノカナトテ、大ナル袋ノ中ニオシ入レテ、手ヅカラ其口ヲ封ジ、柱ニ掛ケサセツ、事ノ由ヲアリノマ、ニ申サツラン程ハ、イツマデモカクテアルベシトアリケレバ、猶モ詞ヲカヘザリケリ、夜既ニアケテ、秀忠常ノ座ニ出デケルガ、夫人ハ早く心得テ、彼ガ幼キ心ニテ、身ノ悲シサヲ顧ミズ、竹千代ノ命ナリト言ハザルコトヲ深く感ジ、侍女ニ朝飯ヲサシ入レ

サセテ又袋ノ口ヲ封ジ置カセケリ、晝ノ程ニ、秀忠與ニ入り來リテ、又推問アリケレド、終ニ其詞ヲ換ヘズ、夫人側ヨリ之ヲ謝セシカバ、サラバ重子テヲ慎メヨトアリテ釋サレタリ、サテ夫人ニ打向ヒ、彼ガ今ノ心ニテ生ヒ立チタランニハ、竹千代ノ爲ニハ、雙ビナキ忠臣ニテコソアルラメト殊ノ外ニ喜ビケルトゾ、

### 第二十九章

亞米利加ノ人、榜那賓弗蘭克林、嘗テ電光ト電氣ヨリ發スル火光トハ同一ノ理ナランカト疑ヒ、

雷雨ノ時ニ、雲中ノ電素ヲ聚導シテ、其確徵ヲ得ント、日ゴロ思ヲ盡シケルガ、費<sup>ラ</sup>地<sup>ノ</sup>費ニテ、高塔ヲ造營スルニヨリ、其落成ヲ俟チテ、絶高ノ處ヨリ銅線ヲ繫ケ、以テ電光ヲ試驗セント、心ノ中ニ思ヒ居ケルガ、營築久シキヲ經レドモ、未ダ其功ヲ竣ヘザルニ、因リ痛ク心ヲ焦シテ、一日其功程ヲ檢スベキ爲ニ、其所ニ至リシガ、塔頂ヨリ遙ニ高キ空際ニ、風鳶ノ絲ヲ導體トシテ、己ガ試驗ヲ做シ得ベキコトヲ、フト悟リテ、一ツノ風鳶ヲ造リ、日ゴトニ發雷ヲ俟チケルニ、或ル日俄ニ空中

小學讀本 卷六 金津堂  
ニ雷鳴ノ聞エケレバ時至レリト打喜ビテ直チ  
ニ其子ト共ニ彼ノ風鳶ヲ放チ麻縷ヲ用井テ之  
ヲ維ギ其下端ニ銅鈎ヲツケ之ヲ良導體ト爲シ  
テ又其鈎ニ絹縑ヲ繫ギ以テ電氣ノ縁ヲ絶タシ  
メ且ツ密ニ其滋潤ヲ防ギテ之ヲ不導體ニ繫ギ  
空ヲ仰ギ眸ヲ凝ラシ專ラ確徵ヲ得ント相待チ  
タリ然ルニ一帶ノ黑雲風ニ從ヒ風鳶ノ傍ヲ通  
過スレドモ風鳶毫モ感觸セザルニ因リ大ニ望  
ヲ失ヒケルガ暫シガウチニ又一帶ノ黑雲來リ  
テ風鳶ニ近ツキシガ忽チ相感ジ細毛蓬々トシ

テ麻綫ノ周圍ニ亂著シ盡ク豎立シケリ之ニ手  
指ヲ近ツケテ進退スルニ其細毛皆指ニ隨ヒテ  
揺クヲ見ル因リテ電氣ノ感ジタルヲ知リ己ガ  
考究ノ符合セシヲ喜ビテ手ノ舞ヒ足ノ踏ムヲ  
知ラザルニ至レリ此時又指節ヲ以テ銅鈎ニ近  
ツクレバ直チニ火光ヲ發シテ且ツ雨ノ麻綫ニ  
濺ギ其滋潤スルニ從ヒ愈導力ヲ倍シテ電力益  
加レリ因リテ銅鈎ヨリ注射スル電氣ヲ以テ之  
ヲ來丁鑷ニ滿タシメ或ハ燒酒ニ火ヲ點ゼシメ  
其他種々ノ試驗ヲ爲スニ皆其効アラザルハナ

シ此發明アリシヨリ後弗蘭克林ヲ指シテ當時ノ理學士中第一等ノ人ト稱スルニ至レリ弗蘭克林ハ試驗ヲ爲スニ當リ其功業ノ後世ニ傳ハリ令名ノ不朽ニ垂ルベキヲ思ヒ之ガ爲ニハ生命ヲ失フトモ遺憾ナシトイヘリシトゾ

### 第三十章

塚原ト傳嘗テ東國ニ下リシ時江州矢走ノ渡ニ著キテ舟ヲ借リケルガ六七人ノ乗合アリ其中ニ長高ク髯黒キ一士アリテ傲然トシテ劍法ヲ談ジ天下ニ敵ナキヤウニ矜リケリト傳初ノ程

ハ知ラズ顔ニテ打眠リ居タリシガ餘リニ人モナゲナルヲ聞キカ子ケン頓テ彼ノ士ニ打向ヒテサテモ様々ノ御物語ヲ承ルモノカナ我モ少年ノ時ヨリ斯道ニハ心ヲコメテ學ビツレドモ今マデ人ニ勝タントハ思ハズ只人ニ負ケジトコソ工夫シツレト言ヒケレバ彼ノ士聞キテ御坊ハヤサシキ劍法カナソハ何トイフ流派ニヤト問ヒケルニト傳イヤタバ人ニ負ケヌ無手勝ナリト答フ彼ノ士ノ云クサラバ御坊ト優劣ヲ試ミンニ手ナクシテ勝チタマハンヤト傳サレ

バ我が心ノ劍ハ人ヲ活スノ劍ナレド、對スル人  
ノ惡シケレバ人ヲ殺スノ劍トモナリ又、彼ノ士  
勃然トシテ舟人ニ向ヒ、急ギ此舟ヲ岸ニ著ケヨ、  
陸ニ上リテ勝負ヲ決セント怒リケレバ、ト傳竊  
ニ乗合ノ者ト舟人トニ目クバセシテ云ヒケル  
ハ陸ハ往還ノ巷ニテ看客コトゴトシ、アノ辛崎  
ノ向ナル離島ニテ人ニ負ケ又無手勝ヲ見セ參  
ラセン、各方モ急ギノ旅ニテオハスラメド、今日  
乗合ノ好シミニ、カシコマデオサセテ縦覽アレ  
カシトテ舟ヲ頻ニオサセツ、離島ニ著クトヒ

トシク、彼ノ士長劍引キ拔キ、岸ノ上ニ飛ビ下リ  
テ、御坊ノ眞甲ニツニナサン、急ギ上リタマヘト  
罵リケレバ、ト傳聞キテ暫シ待チタマヘ、無手勝  
流ハ心静ニセ子バナラヌコトナリトテ裾ヲ高  
クハサミアゲ、腰ノ兩刀ハ舟人ニトラスルナリ、  
其水棹ヲ我ニ得サセヨト云ヒテ、船端ニ立チア  
ガリ、棹ヲ突キ立テ、向ノ岸へ飛バカト見エシ  
ガ、サハナクテ、舟ヲ沖中ニ突キ出シケレバ、彼ノ  
士是ヲ見テ、如何ニ御坊ハ上リタマハヌゾト、氣  
ヲイラチケルニ、ト傳何トテ上リ申スベキ、口惜

クハ游ギテ來タマヘ、我が無手勝ハ是ナリト、高  
聲ニ笑ヒケレバ、彼ノ士餘リノ無念サニ、卑怯ナ  
リ、返セモドセトイヒケレド、ト傳更ニ耳ニモカ  
ケズ、一町許リ漕ギ去リテ、扇ヲ開キ招キツ、此  
劍法ノ奧義ヲバ定メテ殊勝ニ思ハルベシ、執心  
ナラバ重子テ傳ヘン、サラバサラバト云ヒ捨テ  
、カナタノ岸ニ著キケルトゾ、

### 第三十一章

安松金右衛門松平信綱ニ仕ヘテ、代官ト爲リケ  
ルガ、信綱其采邑ナル武州野間畠トイフ所ニ多

摩川ノ流ヲ引キタランニハ、開發ノ田地モ出デ  
來ベキカ否ト議セラレシニ、金右衛門如何ニモ  
然ルベキ由ヲ言ヒテ、凡ソ金三千兩ヲ費スベシ  
トアリシカバ、信綱聞キテ、我長ク此所ヲ領スル  
カ、或ハ移封セララル、カ知ルベカラズ、サレド今  
日三千金ヲ費シテ、永ク此地ニ利アラントナラ  
バ、國ニ報ズルノ一ツナリトテ、乃チ金右衛門ニ  
命ジテ、多摩川ノ水ヲ引カセントテ、十六里ガ程  
溝洫ヲ穿チテ、新河岸トイヒケリ、カクテ水流レ  
入ルカト待ツホドニ、更ニ水來ラズシテ、一トセ



ヲ經タリケレバ、信綱金右衛門ヲ召シテ、イカテ  
水ハ至ラザルゾトアリシニ、如何ニモ水ハ入ル  
ベキハズナレド、何カ仔細ノアルコトナラント  
バカリ答ヘケルガ、其明年ニモ水來ラザリケレ  
バ、又金右衛門ヲ召シテ、尋子問ヒケルニ、必ず入  
ルベキハズナレド、カク久シキマデ入ラザルハ  
イト訝シ、但シ此地ハ武藏野ナレバ、川越ノ城下  
ノ人家、常ニハ疊ノ上ニ柿紙ナドヲ敷キテ、客來  
レバコレヲ卷キテ、サテ請ジ入レヌ、コハ土地乾  
キテ、然モ風常ニ荒レ、座中忽チ塵埃ニ埋モル、

か故ナリ、然ルニ今年ハ城下ノ塵埃、昔日ノ如ク  
ナラズ、殊ニ武藏野ニ種エタリシ穀物ハ、今歳程  
豊ナルコト嘗テ覺エズ、必ず既ニ多摩川ヨリ此  
溝ニ流レ入りタルナレド、曠原平野ニ分テルカ  
ラニ、未ダコ、ニハ流レ來ラザルナラン、此水原  
野ニ滿チタラン後ハ、必ず流レ來ルベキモノヲ  
ト答ヘタリ、其明年ニ至リテモ、水來ラザリケレ  
バ、又金右衛門ヲ召シテ、尋子問ヒケレド、去年ノ  
如ク答ヘテケレバ、汝土地ノ卑高ヲ審ニセザルガ  
故ニ、水ノ流レザルニカト、詰リケレド、金右衛門

更ニ驚ク色ナシ、サテ其年ノ秋ニ至リテ、大雨ノ降リケル後ニ、サナガラ雷ノハタメクガ如ク水ノ音轟キ渡リテ、長溝ニ溢レ滿チ、平地ニマデモ上ラントスルバカリニテ、六七寸ノ鮎流レ來ルコト夥シク、只一時ニ十六里ガ程ニ流レワタリテ、新河岸ノ川ニ流レ入りケリ、是ヨリ田地モ開ケユキテ、野間島二百石ノ地、忽チニ二千石ノ地トナリヌ、信綱金右衛門ヲ召シテ、コノ年頃汝ヲ責メ促シタルニ、遂ニ驚クコトモナク、重子テ溝ヲ修シナントモセザルコト、感ズルニ餘リアリ

トテ其俸祿ヲ倍シケルトゾ

### 第三十二章

寛永ノ頃幕府ニ三人ノ勘定頭ヲ置レシ時、伊丹康勝其首座ニ選バレ、農ヲ勸メ商ヲ通ジ、民ト俱ニ利ヲ同クシケルガ、其頃税金ヲ幕府ニ獻ジテ、甲斐國ヨリ出ル紙ヲ一人シテ商フ者アリケリ、然ルニ又一人ノ富商アリテ、今迄ノ税金ニ一千兩ヲ増シテ、其業ヲ引キ受ケンコトヲ乞ヒ出デケレバ、幕議之ヲ許サントセシニ、康勝一人之ヲ不可ナリトシテ、三年ノ久シキニ及ビテ、其議決

セザリケレバ、執政ノ人々康勝ニ向ヒテシカジ  
カノ事請フ者アリ、同職ノ人皆之ヲ許サントセ  
シニ、子獨リ用キラレヌトキクハ誠ニヤ、天下ノ  
富ヲ以テ見ルトキハ、千兩ノ金ハ少ナシト雖モ、  
是ヲ以テ國用ニ資ナシトハイフベカラズ、イカ  
ニトアリケレバ、康勝、今ヨリ盜賊ノ起ラヌ道ダ  
ニアラバ、如何ニモ許シ申スベシト答フ人々、如  
何ナル仔細ゾト問ヒケルニ、康勝紙ハ貴賤一日  
モ闕クベカラザルモノナレド、其價ノ賤シケレ  
バ、コソ、世ノ資トハナリツラメ、今乞フ者ノ獻ゼ

ントイフ千兩ノ金ハ、イツクヨリ出スベキ、定メ  
テ紙ノ價ヲ増サンノミ、賤民日々ニ用キル紙ノ  
價増シタランニハ、何物ヲ以テカ此ニ換フベキ、  
然ラバ此等モ亦其商フ物ノ價ヲ増シ、其得ル所  
ノ利ヲ以テ之ヲ買フヨリ外ハアラジ、凡ソ一物  
ノ價増ストキハ、萬物ノ價同ジク貴クナルコト  
ハ、皆定レル事ナリ、價貴クナルニ至リテ、求メン  
トシテモ得ラレザレバ、或ハ飢エ或ハ寒ユメリ、  
飢寒ニセマレバ、必ず死ス、死ストモ守ル所ヲ失  
ハヌハ、賤民ノ爲シ得ベキニアラズ、サテコソ世

ニハ盜賊ノ起ルナレ、コハ只農ト商トノ事ノヤ  
ウナレド、士ノ召シ仕フ奴婢トテモ、物ノ價ノ貴  
クナリテ、求メ得ラレ子バ、盜ミセズトハイヒガ  
タシ、カク盜ノ世ニシゲク成リナン時ニ至リテ  
ハ如何ナル政事モテ、コレヲ止メタマハンヤ、民  
ニ許シテ利ヲ争ハシメ、其利ヲ官ニ收メナバ、天  
下其風ニ靡キテ、ヨキ人々モ利ヲ争ヒ、各其欲ス  
ル所ヲ得ント思フベシ、此等ハ盜セ又盜人ニテ、  
其禍ハ盜スルヨリ甚シ、官ノ費ヲタバ省キナバ、  
一年ノ餘贏幾千萬兩ニモ及ブベシ、僅ニ千金ヲ  
増サントシテ、世ノ風ヲ亂サンハ、身ノ肉ヲ切り  
テ飢ヲ救フニ同ジ、其腹滿ツトイフトモ身斃ル  
ベシ、總ベテ價ノ貴クナルハ、國郡ノ收斂多キニ  
因ル、我既ニ年老イヌ、後ノ財務ニ任ゼン人、常ニ  
此心得アランコトコソ、願ハシケレトイヒケレ  
バ、人々感ジアヒテ、事遂ニ罷ミケルトゾ、

### 第三十三章

武田信玄駿州ニ打出テ、沼津アタリニ放火セ  
シ時、妙海寺妙覺寺ノ僧侶打集ヒ、甲州ノ軍兵定  
メテコ、マデ亂暴スベシ何ニシテカ此難ヲ避

クベキト評議區々ナリケルニ妙海寺ノ雛僧進  
ミ出デ、此使者ハ我ニ命ゼラレタシト云フ師  
僧如何思ヒケン然ルベシトテ許シタリ、カクテ  
雛僧只一人、信玄ノ陣中ニ至リ己ハ此邊ノ柴寺  
ノ僧ニテ候ガ今度公ノ此マデ打出デタマフハ  
今川氏真ノ惡シキ法度ヲ止メ北條氏康ノ手ヲ  
覆ス如キ政事ヲ禁ゼラレ、清廉ノ沙汰セラレン  
ガ爲ナルベシト存ゼシニ、民家ニ火ヲ放チ、老少  
ヲ打殺シ、僧尼ヲ海ニ投ゲ入レ、佛寺ヲ破却セラ  
レント言フ者アリ、何レカ實ナラン、一定ニ承リ

テ後身ノ覺悟ヲバ定メント存ズルナリト述べ  
ケレバ、信玄之ヲ召シテ如何ニ雛僧、汝モ寺ノ徒  
弟ナレバ、海ニ投ゲ入ルベキ奴ナルニ、今ノ一言  
ノ膽ノ太サヨトテ、ハタト之ヲ睨マヘケルニ、雛  
僧袖ヲカキ合セテ、公ハ法性院大僧正ト申シタ  
マヘバ、海ニ入ル大先達トコソ憑ムベケレ、何ノ  
恐カアルベキトテ、益、動カガリケレバ、信玄聲ヲ  
和ゲテ、イヤトヨ、北條今川ノ亂暴ニ、民ノ苦ムガ  
イト憫レサニ、兵ヲバコ、マデ率キタルナリ、何  
トテ罪ナキ僧尼ヲ虐ガベキ、雛僧ガ寺ハ何ト謂

フゾ、竹木ヲダニ伐ルベカラズ、箭錢ノ沙汰ニモ  
及ブマジ、イザ制札ヲ取ラセントテ、右筆ドモニ  
命ジケレバ、右筆紙ヲ展ベテ、其文ヲ請フ時ニ、雛  
僧ツト差シヨリテ、今川家ノ制札ハ、カクコソア  
リツレ、今度モ亦サヤウニ認メタマフカト、云ヒ  
ケレバ、信玄其明敏ナルコトヲ賞シ、師僧ヲ呼ビ  
テ、此雛僧ハ凡庸ナラズ、心シテ育ツベキ由ヲ懇  
ニ云ヒシカバ、師僧奇異ノ思ヲナシテ、共ニ其寺  
ニ還リケルニ、其夜何者トモ知ラズ、武士三四人、  
彼ノ寺院ノ客殿ニ入りテ、鎧脱ギ棄テ、高鼻カキ

テ打臥シヌ、雛僧之ヲ怪ミテ、枕頭ニ立チヨリ、何  
者ゾ、狼藉ナリ、疾ク去レト荒ラカニ咎ムレバ、武  
士身ヲ起シテ、是ハ甲州方ノ兵士ナリ、苦カラヌ  
者ヨト言ヒテ、其儘ニ打卧サントセシニ、雛僧、イ  
ヤ甲州ノ兵士トアラバ、彌速ニ立チ出ツベシ、遅  
々セバ、大將ニ申スベキゾト云フ時ニ、其武士、我  
ハ原隼人佑トイフ者ゾ、暫時許セカシト云ヒケ  
レド、雛僧更ニ之ヲ聽カズ、軍兵ノ止宿ヲ禁制セ  
ラル、處ナレバ、誰ニモアレ出デラレヨトテ、終  
ニ之ヲ追ヒ出シケリコハ、信玄ガ雛僧ノ膽ヲ試

ミニントテノ所爲ナリトゾ

### 第三十四章

徳川秀康越前ニ封セラレシ後阿閉掃部トテ武功ノ譽アル者ヲ厚祿ニテ召シ抱ヘケリ又狛伊勢トイフ者アリ國ニテ世祿ノ者ナリシガ其子ニ鎧ノ著初セサセケル時彼ノ掃部ヲ招キ天子ニ鎧キスルコトヲ頼ミケリ饗膳モスミテ祝ノ盃ニナリシ時伊勢今日ハ愚息ガ鎧ノ著初ナレバ卿ノ武功ヲ語リテ前程ヲ祝セラレヨトイヒシニ掃部イヤトヨ我が身ニハ語リ出ヅベキ武

功ナシサレド御望モ黙シガタキマ、我嘗テ武者ブリノ最モ觀ルベキ一人ノ士ヲ見タリシ事ヲ語リ申スベシ江州志津嶽ノ戰ニ暮ガタニ我單騎ニテ余語ノ湖ニ沿ヒテ退キケルニ一騎ノ後ヨリ呼ブ者アリ馬引キ返シテ之ニ接スレバ則チ曰ク今朝ヨリイタヅキ候ヘドモ不幸ニシテ未ダ好キ敵ニ遇ハズ子ノ儀容ヲ觀ウケ幸トコソ存ジ候ヘ不肖ナガラ御相手ニナリ申スベシトテ進ミヨリケル故ソレコソ我モ望ム所ナレトテ互ニ馬ヲ乘リ放シ己ニ槍ヲ合セントシ

ケルニ、其人シバシ待チタマヘ、今朝ヨリ雜兵ヲ  
多ク突キ殪シツル、槍ハイタク汚レタリ洗  
ヒテ後ニコソトテ槍ヲ湖水ニ打浸シ、ニタビ三  
タビ洗ヒツ、サラバトテ突キ合ヒシガ雌雄未  
ダ決セザリシニ日ハ早暮レテモノ、アヤメモ  
見エズナリニキ、其時彼ヨリ又詞ヲカケテモハ  
ヤ槍鋒モ見エザレバ、残り多クハ候ヘドモ、他日  
ヲ期セン、御名ヲコソ承リタク候ヘ、身ハ青木新  
兵衛トイフ者ナリトテ、己ガ名ヲモ尋子テ、此後  
又陣頭ニテ出デ合ヒナバ、誓ヒテ他人トハ勝負

ヲ決スマジトテ、立チ別レシガ、我少年ニシテ軍  
ニ從ヒシヨリ、カクバカリナル武士ハ、遂ニ見侍  
ラズ、イカバナリハテシニヤト語リケルニ、其比  
伊勢ガ許ニ出入スル青木方齋トイフ浪士アリ  
其日モ來リテ厨ニ居タリシガ、此物語ヲ打聽キ  
テニジリイデツ、掃部ニ向ヒ、サテモ只今ノ御  
物語ヲ承リ、今更昔ヲ懷ヒ出シテ涙ヲ落シヌ、其  
時君ト槍ヲ交ヘタル者ハ、我ナリトテ、當時雙方  
ノ鎧ノ模様馬ノ毛色ナド、一々言ヒケルガ、一ツ  
モ違ハザリケレバ、掃部ハ、ハタト掌ヲ拍チテ、サ



テサテ久シブリニテ遇ヒ參ラセ本望ノ至リナ  
リトテ盃ヲ方齋ニサレ、好シミノシルシニトテ  
腰ノ刀ヲトリテコレニ贈リ又此ヨリ方齋が名  
高クナリテ遂ニ秀康ノ耳ニ入リシカバ、掃部ト  
同ジキ禄ニテ召シ抱ヘケルトゾ、

### 第三十五章

松平忠直ノ老臣杉田壹岐微賤ヨリ登庸セラレ  
テ厚祿ヲ賜ヒ國老ニ列シケリ、常ニ直諫シテ、主  
ノ過ヲ匡救スルヲ以テ務トセリ、或ル時忠直國  
ニ在リテ鷹ヲ放チ、晡時ニ及ビテ城ニ歸リケレ

バ家老ドモ出デ迎ヘケルニ、忠直氣色ウルハシ  
ク今日我が者ドモノ勞動イツニ勝レテ見エシ、  
アレニテハ萬一ノ事アリテ出陣ストモ、用ニ立  
ツベシト覺ユルゾカシ、皆承リテ悦ベヨトアリ  
シカバ、家老ドモ何レモ、メデタキ御事ナリト答  
ヘタリ、然ルニ壹岐一人末座ニ在リテ、黙々トシ  
テ居タリケレバ、壹岐ハ何ト思フゾトアリシニ、  
只今ノ御意ヲ承リツルニ、憚リナガラ歎シキ御  
事ナリ、近頃諸士ノ御鷹野ニ從フトキハ、サキニ  
テ御手討ニアハンモ計リガタシトテ、妻子ニ訣

レテ立ち出ヅル由承リヌ、カヤウニ君ヲ疎ミ參  
ラセテハ、萬一ノ時御用ニ立ツベシトモオモホ  
ヘズ、ソレヲ知ロシメサレズシテ、頼モシク思召  
サルコソ淺マシケレ、ト言ヒシカバ、忠直大ニ氣  
色ヲ損ジタリ、近臣カクト見テ壹岐ニ向ヒ、座ヲ  
立タレヨト言ヒケルニ、壹岐ハタト睨ミテ、其許  
夕チハ、御鷹野ニ隨ヒテ猪猿ナドラ逐ヒマハス  
ヲ奉公トスレド、此壹岐ガ奉公ハサニアラズ、イ  
ラザル事ヲ申サル、ナトテ、其儘ニ佩刀ヲ脱ギ  
テ後口ニ投ゲ棄テ、忠直ノ側ニツト進ミヨリテ、

夕、此上ハ御手討ニセサセタマヘ、空シク存ヘ  
テ、御運ノ衰ヘサセタマフヲ視ンヨリハ、只今御  
手ニカ、リナバ、セメテハ御恩ヲ報ジ奉ルシル  
シトモナリナント言ヒテ、頸サシ延ベテ平伏シ  
ケリ、忠直何ノ詞モナクテ入りシカバ、諸老壹岐  
ニ向ヒテ、折モアルベキ事ナルニ、君ノ御氣サキ  
ヲ折ラル、事、遠慮ナキニ似タリト言ヒケルニ、  
壹岐君ノ顔色ヲ候ヒテ諫メントセバ、好キ折ト  
テハナキモノナリ、今日ハ好キ折トコソ存ジ候  
ヘト言ヒケレバ、諸老各感ジアヒケリ、サテ家ニ

歸リテ、君命ノ下ルヲ待チツ、其妻ヲ呼ビテ、諭シテ曰ク、汝ハ女ノ身ナレバ、直チニ御恩ヲ受ケタルニテハ、アラザレドモ、我厚恩ヲ荷ヒシガ故ニ、歩卒ノ妻ト言ハレシ身ガ、今ハ老職ノ妻ト呼バレ、侍婢所從ニカシヅカル、ゾ限リナキ御恩ナル、サレバ我死ヲ賜ヒタル後ニテモ、唯朝夕ニ御恩ノ深キコトヲ忘レズシテ、カリニモ君ヲ怨ミ奉ル心アルベカラズト言ヒテ、サテ今ヤ今ヤト待チケル程ニ、夜フケテ門ヲ敲ク人アリ、召アルマ、ニ登城スベシトナリ、サテコソト思ヒテ、

登城シケルニ、ヤガテ寢室ニ召シ入レテ、晝ノ程、汝ガ言ヒシ事、心ニ懸リテ寢子ラレヌマ、夜陰ナレドモ呼ビツルナリ、深ク汝ガ志ノ程ヲ満足ストアリテ、手ヅカラ佩刀ヲ賜リシカバ、壹岐ハ思ヒモヨラヌコトニテ、覺エズ涙ニ咽ビツ、賜ヲ拜シテ罷出デケルトゾ、

明治十七年十一月五日版權免許  
同二十年五月十九日校正御届

定價金七錢

纂述人

東京府士族

阿

部

弘

藏

東京府士族

出版人

原

亮

三

郎

小石川區竹早町百二番地  
日本橋區本町三丁目七番地



大賣捌

金港堂原亮三郎支店

兵庫岐阜

金港堂支店

賣捌

各府縣下代理大賣捌所